

ゴットフリートの『トリスタン』

——内膳頭エピソードについて——

Gottfrieds »Tristan«

—— Über die Truchseßepisode ——

斎 藤 芙美子

前稿「花嫁出迎えの旅」につづく章、即ち8897行から11366行までを、「内膳頭エピソード」として、ここに取り上げたい。

この部分は、「竜との戦い」(Der Kampf mit dem Drachen),「こぼれ刃」(Der Splitter),「証拠」(Das Wahrzeichen)と称される三章にあたる。

このエピソードは、トリスタン伝説にそっており、竜を退治した者に懸賞として与えられることになった王女イゾルデをめぐる内膳頭とトリスタンとの対決物語である。

しかしながら、この伝説を物語るゴットフリートの筆致には、「タントリス・エピソード」¹⁾、「花嫁出迎えの旅」²⁾に引きつづいて、王女イゾルデとトリスタンとの愛の軌跡が鮮明に刻まれていると筆者には思われる。その軌跡を明らかにしていきたい。

1

メルゲル (Bodo Mergell) によれば、中世に伝えられていたトリスタン伝説の最も古い段階では、まだ竜との戦いのエピソードは含まれてはおらず、「中世トリスタン伝説の第二段階」³⁾になって、つけ加えられたようである。

しかし、王女を怪物から救い出し、その舌を切り取る英雄の話は、BC 6世紀のギリシャ時代にまでさかのぼれる。更に、その切り取った舌を証拠品として詐欺師に突きつける話は、やはり古代ギリシャにも存在していたと、オッケン (Lambertus Okken) は指摘している。⁴⁾

古代ギリシャ以来の起源をもつ竜退治の説話が「中世トリスタン伝説の第二段階」で付

け加えられ、トリスタンが詐欺師である内膳頭を退けて、王女イゾルデを獲得するというプロットがその整合性を備えて語られることになったようである。

まず、ゴットフリートは、次のように語り始める。

「今やトリスタンは身の安全をえた。彼が何をしようとしているのか、まだ誰も聞いたことがない。今それを諸君に教えてあげよう、そうすれば、諸君もこの物語に退屈されないであろう。この物語は当時その国に住んでいた竜のことを伝えている。その恐しい悪魔はその国民をひどく苦しめ、恐ろしく痛めつけていたので、国王は一つの誓いを、王の言葉にかけて誓った。もし誰かその悪魔を殺してくれれば、その者に、身分高い騎士であれば、娘をやろう。……

この話をトリスタンもよく知っていた。このことが唯一トリスタンをして、この旅行を行わせたのであり、彼の最大の希望であって、他には何の望みも彼は持ち合せていなかった」(8897…8924)。⁵⁾

上記のゴットフリートの説明から、ホラント (Gisela Hollandt) は二つの点が明らかになると指摘している。「1. トリスタンの努力目標と計画予定が改めて判明する。2. 今回は、策略によって成しとげられるような——その場合、策略は二次的な機能しかもたないのだが——任務ではなくて、何よりも戦いにおける勇氣と才気によってなしとげられる任務が問題なのである。王女の獲得は、将来の夫たるべき者が、夫になることによってもたらされる高い地位にふさわしい適性を示す行為によってなされなければならない。合法的な所有は、策略を用いて入手される、つまり詐欺によって入手されることはできない。

このことを具体的に示すのが、臆病な内膳頭の物語の意味であって、彼はその本質と行動様式によって、トリスタンとの対照的人物として出現する」。⁶⁾

では、「トリスタンとの対照的人物」として、ゴットフリートは内膳頭をどのように描写したのであろうか。

竜を目指して、十分に武装を整え、たくましい馬にまたがって出発したトリスタンは、「四人の武装した男たち」(8944 vier gewafende man) が逃げ帰ってくるのに遭遇する。「その四人のうちの一人が王妃の内膳頭であって、彼は若い王女の恋人でありたいと願っていたが、それは全く王女の意に反することであった。そして誰かが幸運と勇氣を懸けて戦いに出かける時は、この内膳頭もまた、いつでも、どこにでも現われた。戦いに出かけた時に、彼もいたと云ってもらうためであって、他には何の意味もなかった。というのも、彼は竜をみるや否や、素速く踵を返したのだから」(8948-8962)。⁷⁾

ゴットフリートは、「内膳頭は、王女の意に反して愛情を押しつけているし、また詐欺師である」⁸⁾ことを、早々と指摘する。

この臆病な詐欺師、内膳頭が逃げ帰った後に、トリスタンは竜と対決することになる。死闘の末竜を倒した「トリスタンは、その喉から剣で舌を好きなだけ切り取って、懷に入

れた。そして再び口をふさいでおいたのである」(9060-9064)。⁹⁾

しかし、その舌から発する毒気のために、トリスタンは泉のほとりで気を失って倒れてしまう。

断末魔の竜の恐しい叫び声を遠くで聞きつけた内膳頭は、一人ひそかにとって返し、竜の死を確認する。彼はこの竜を倒した男を見つけ出して殺そうと、あちこち探しまわることが無駄であった。

そこで彼は竜の殺害を自分の手柄として、次のように吹聴した。

「さあ、皆々、耳をお借り下さい。とくこの奇蹟をご覧いただきたい。勇気のある男が、その不変の勇敢さが、愛する女性のために何を成し遂げようとしているかを！

私は自分の陥った困苦から生きて還ったことを、不思議で、不思議でならない。全く確信しているが、もし私がもう一人の男のように軟弱であれば、私は決して生還しなかったであろう。

その男が誰なのかはわからない。一人の冒険野郎が冒険を求めて馬に乗り、不幸にも私の到着する前に竜の所へやって来て、そこで果てたのだ。神が彼を見放されたのでありましょう。馬も人も両方ともくいちぎられ、殺されていた。馬は噛みちぎられ、焼け焦げてまだ半分そこに横たわっている。こんなことを長々と話して何になろうか。かつて男が女のために被ったことのないような苦しみを、私はこの度は受けたのです」(9221-9246)。¹⁰⁾

ここに引用した「内膳頭の華々しい法螺の中に、ゴットフリートは宮廷物語の最も陳腐なモチーフの一つ、即ち、貴婦人の名誉のために信じられないような英雄的行為を行う貴婦人奉仕の騎士を、あからさまに戯画化している」¹¹⁾とニッケルは指摘しているが、ゴットフリートが、詐欺師内膳頭を終始一貫して戯画化したことを聞き違える聴衆は、誰一人としていなかったであろう。

2

竜の頭を切り取り、証拠品としてアイルランド王に王女を請求する内膳頭のことを伝わると、「可愛い乙女、美しいイゾルデは、全く心底うちひしがれた。未だ彼女はこんな悲しい日に遭遇したことがなかった」(9269-9271)¹²⁾とゴットフリートは語っている。

更に詩人は王女イゾルデに次のようにも語らせている。

「私はそれに従うくらいなら、むしろナイフを胸に突き刺します。私に対する内膳頭の要求が通るくらいなら、むしろ私は自分で自分の命を絶ちます。あの人はイゾルデを妻にも、女主人にもすることはありえません。その前に私が死んでしまっているのを、あの人は知ることでしょう」(9286-9292)。¹³⁾

このイゾルデの言葉について、ヴェーバー (Gottfried Weber) は、「イゾルデは心の底

で、無意識の奥で、すでにトリスタンに結ばれているので、内膳頭への拒絶が前代未聞の情熱的な抵抗にまで強まっている」¹⁴⁾と解釈する。

これに対して、フェルストナー (Hans Furstner) はヴェーバーの解釈を誤りとして、「〈無意識の奥で、すでにトリスタンに結ばれている〉というのではなくて、侮辱された誇りと家柄に対する当然の感情がイゾルデに情熱的な言葉を口にさせているので、それらの言葉はこの状況では決して〈前代未聞〉とはみなされない」¹⁵⁾と反論しているが、筆者には、為にする反論だと思われる。

王女イゾルデの、自分の命を絶ってでも内膳頭の妻にはならないという強烈な拒否姿勢を、王妃と王女が泉のほとりに倒れているトリスタンを見つけ出す以前のこの段階で、何故ゴットフリートはこれほどまで強調して語ってきかせたのであろうか。詐欺師内膳頭に対する母娘の侮蔑を伝説通りに物語るのであれば、ここまで強調する必要があったのであろうか。

これは、竜を実際に退治した人は必ず他にいてと考えて、王妃、王女、ブランゲエネ、パラニースの四人がこっそりと探索に出かけた後につづく、以下に述べるプロットへの伏線であったとみるべきであろう。

「今や、ことはなるべきようになった。運命の望むように (9370 *alse der billich wolte*) になった。若い王女イゾルデは彼女の命となり、死となり、彼女の喜びとなり、苦しみとなる人を、まっ先に見つけたのであった。その人の兜から一条の光が出ており、それが王女に異国の人を告げ知らせた」(9369-9376)。¹⁶⁾

王女イゾルデが、息も絶えだえのトリスタンをまっ先に見つけ出したのは、「運命の望む (*alse der billich wolte*)」とこころであったと、ゴットフリートは述べている。ここで用いられた *billich* については、「ゴットフリートの愛用語」であって、「*billich* は“より高い正義”として、究極には恐らく神のごとき立法者自身の摂理として理解されうるのであろうか」¹⁷⁾と、カムブリッジ (Rosemary Norah Combridge) が解説しているように、王女イゾルデとトリスタンとの出会いには、人知の及ばない、神の摂理のごとき運命の力が働いているとゴットフリートは主張したかったのであろう。

タントリスとして王女イゾルデに出会ったことによって、両者の間に芽生えた愛は、神の摂理のごとき運命の力によるものであったからこそ、王女イゾルデに、トリスタンを見つける以前の段階で、自分の命を絶っても内膳頭の妻にはならないと、ゴットフリートは語らせたのではなかろうか。

神の摂理のごとき運命の力が王女イゾルデとトリスタンの間に働いていたからこそ、竜の舌の毒気で意識を失って倒れていたトリスタンが、意識を取り戻して王妃たちを見た時、「あゝ、恵み深い神よ、あなたは私を見捨てられなかった。三つの光が、この世の最高の光が、多くの人の心にとって、喜びとなり慰めとなり、多くの人の目にとって楽しみとな

る方々が、私をとりまいておられる。光り輝く太陽のイゾルデが、その母上たる晴れやかな曙のイゾルデが、美しい満月の、立派なブランゲーネが」(9450-9460)¹⁸⁾とトリスタンは王女たちとの運命的遭遇を神に感謝したのであった。

この場面について、ヴェッセル (Franziska Wessel) は、「竜との戦いの後で、失神状態からのトリスタンの目ざめは——彼は夜明けの光の中で、彼の救済者たちを、三つの光として認識しているが、まず最初に若いイゾルデを、(8256行-8286行の) 讃辞¹⁹⁾の中で称えた〈光り輝く太陽〉として認識するのだが——イゾルデに対する彼の情愛の潜在意識の中へ、瞬時の意識回復と意識喪失を象徴化しているのではなからうか」²⁰⁾という見解を呈示しているが、正鵠を射た解釈といえよう。

王女イゾルデは、声も絶えだえに話すトリスタンの姿をじっと見ていたが、「この人は以前に見たことがあるとすれば、楽人タントリスよ」(9472-9473)²¹⁾と、誰よりも先にトリスタンを認識している。「母親でもなく、また婦人部屋に着いてからでもなく、トリスタンの声の最初の響きで、若いイゾルデは彼女のかつての師を認識している。彼の姿は彼女にとって忘れがたい印象を与えていたのである」²²⁾とランケ (Friedrich Ranke) は指摘した。このランケの見方に対して、フェルストナーは、イゾルデの身元を確認する言葉には、「どんな感激もないし、反対に全く冷ややかに語っている」²³⁾と反論しているのだが、余りにも主観的な反論だと思われる。

倒れているトリスタンの兜から反射する光を、誰よりも先に気づいたのは王女イゾルデであったのだが、その声からタントリスであることを確認する最初の人も、やはり王女イゾルデであったことを、ゴットフリートは聴衆に物語っている。トリスタンと王女イゾルデの結びつきが、billich の力によることを詩人はくり返し表現しているのだと解すべきではなからうか。

3

竜を退治したのがタントリスであったことを知った王妃は、グルムーン王やその家臣達の居並ぶ審判の席で内膳頭と対決することにした。

竜の頭を「覆すことの出来ない証拠」(9846 wortzeichen)²⁴⁾として、王女を求める内膳頭に向って、王妃は次のように反撃した。「このようにあなたは頭を持ってきました。こんなことでイゾルデを手に入れられるものなら、他の人でも容易に持ってきたらと思います。しかし、娘はこんな簡単なことでは得られませんよ」(9847-9852)²⁵⁾。

王女イゾルデもまた、「私はあなたに好意も愛情も持ったことはありませんし、これからも決してそんなことにはならないでしょう」(9864-9865)²⁶⁾と突き離れた。

それに対して内膳頭は次のように答えた。

「よくわかっています。あなた方は全ての女性と全く同じように振る舞われます。あなた方はみんなそういう体質で、そういう性質で、そういう考え方なのです。あなた方にはいつも悪いものがよく思われ、よいものが悪く思われるのです。こういう性向はみなさんには強いのです。

あなた方は全て逆なのです。あなた方には愚者が賢者で、賢者が愚者なのです。あなた方はまっ直ぐなものを曲っているとし、曲っているものをまっ直ぐたとするのです。あなた方はご自分の猟犬の綱にあらゆるあべこべのものをつないでおられるのです。あなた方を憎む者を愛し、愛する者を憎むのです。

どうしてこんな風にお考えになるのでしょうか。どうして反対のことばかりを、よくお見かけするほどこんなにお好きなのでしょうか。あなた方を求める人を求めず、あなた方を求めない人を求めておられるのです。あなた方は盤上でやれる最もややこしいゲームです。保証もなく女性のために命をかける者は愚か者です」(9866-9892)。²⁷⁾

これに対して王妃は次のように答える。

「内膳頭よ、あなたの頭脳は強くて鋭いことですね、頭脳の鋭さがわかる者にはね。まるで婦人部屋で女の秘密を探り出したかのようですね。その上あなたは、まるで婦人奉仕の騎士にこそふさわしいような考えをもち出してきました。

あなたは女のやり方を十分過ぎるほど知っています。その点では男のやり方が奪い去られたように、あなたはなっています。あなたも逆さまがとてもお好きです。それもあなたにはお似合いだと思いますよ。あなたも女のやり方を猟犬綱につないでいますよ。あなたを憎んでいるものを愛し、あなたを望んでいないものを望まれる。しかしこれはわれわれ女のゲームです。

こんなことをしてあなたはどのようなのですか。確かにあなたは男なのです。女のやり方はわれわれ女にお任せなさい。そんなことをしてもうまくいきませんよ。男の考えをもちなさい。あなたを愛するものを愛しなさい。あなたを望むものを望みなさい。そのゲームはいい結果を生みますよ。

あなたはイゾルデを望んでいるのに、彼女は望まないと、さかんにおっしゃってる。それは彼女の性質で、誰もどうすることもできません。彼女はたやすく手に入るものはやり過すのです。彼女を大変愛している人など彼女にはどうでもいいのです。その先頭がまさにあなたです。こういう性質は私から彼女に受けつがれたのです。私自身あなたに好意をもったことは一度もないのです。イゾルデもそうだということをよく知っています。これは私からあの子に受けつがれた性質です。彼女に愛情をそそいでも無駄なのです。

あの美しい娘が、あの清らかな娘が彼女を望む人を望まなければならないのなら、余りにも品位がありません。内膳頭よ、あなたのいわれたように、わが殿はよろこんで誓いを果されるはずです。あなたの主張と話を貫いて途中で投げ出さないように、気をつけなさ

い。あなたの要件を頑張りなさい。私は他の人が竜を倒したと聞いています。それに対しあなたは何かいわなければなりませんよ」(9898-9954)。²⁸⁾

この長い二人の論争について、ニッケルは次のような批評をしている。

「内膳頭とアイルランド王妃との間の華々しい論争の中でゴットフリートの立場が必ずしもはっきりと決定しうるわけではない。彼は勿論ここでも、あの恥かしくも自分の役割をわきまえない“婦人奉仕騎士”を通して、貴婦人方に、多少の好意を語っているが、その好意が必ずしもゴットフリートに無条件の女性崇拜があると推測させるわけではない。

〈あなた方にはいつも悪いものがよく思われ……(上記内膳頭の台詞参照)……。この優雅なテーマが20行以上にわたって、くり返され、新しく変化していくのだ！……王妃の答えは、内膳頭にその筋の通らない話に対してたっぷりお返しをするばかりか、同時に彼に代表される婦人奉仕全般に対しても矛先を向けているのだが、この答えこそまさしく何よりもゴットフリートがこの場面の改作をした本来の目的であったと思われる。ここでは確かな筆遣いで恋い焦がれる婦人奉仕の本質が把握され、少し戯画化され、笑いものにされている。〈あなたは女のやり方を十分過ぎるほど……(上記王妃の台詞参照)……われわれ女のゲームです〉。おどろくべきはその眼光の鋭さ、流行からの独立性であって、流行の最も痛い所がまねのできない鋭敏さでかぎつけられ戯画化されている。というのも、ミンネザングの現代の批評家といえども、ミンネザングの、男らしくない、不快なほど女性的なものへそれてしまっているやり方をこれ以上鋭く照し出すことは不可能であろう」。²⁹⁾

ミンネザングに代表される当時の文学的流行に対するゴットフリートの鋭い戯画化と解釈するニッケルに対して、ディーツ(Reiner Dietz)は次のように反論している。

「ニッケルによって婦人奉仕と性格づけて引用された詩句は、ミンネゼンガーの婦人奉仕者を描写しているのではなくて、典型的な婦人のやり方を描写しているのである。これらの詩句はミンネザングとも、高きミンネとも何の関係もない」。³⁰⁾

「内膳頭とアイルランド王妃との間の華々しい論争」については、ニッケルの解釈が正当なのか、ディーツのようにみるべきなのか、筆者には直ちには判じかねる。しかし王妃イゾルデが内膳頭の主張を逆手にとって、見事な弁舌で論破する姿こそ、ゴットフリートが「王は王妃によって二つの類まれな幸運、男が愛する妻に見出さる最良のものをもつことができた。それは美しさと聡明さであって、それは王が王妃を愛さずにはおれないほどたっぷりと、王妃の身に備わっていた」(9717-9723)。³¹⁾と称賛した姿ではなかったろうか。

ゴットフリートが女性の特性の中で美しさと聡明さを最も称えていたのだと考えれば、「改作」³²⁾して「華々しい論争」をここに挿入した意図は、王妃の聡明さへの賛歌でもあったのではなからうか。

筆者はまたこの王妃の反論の中で、次の言葉に注目したい。「こういう性質は私から彼女に受けつがれたのです。私自身あなたに好意をもったことは一度もないのです。イゾル

デモそうだということをよく知っています。これは私からあの子に受けつがれた性質です」と、王妃と王女の相似性がわざわざ強調されている。

内膳頭に対する母娘の嫌悪感が相似であることを聞かされた聴衆は、すぐにタントリスに対する母娘の好意も相似であることに気づかざるを得なかったであろう。何故なら、泉のほとりで倒れていたタントリスを連れ帰った時、王妃は、内膳頭に対する場合とは対照的に、「私は今回とこの前と、二度もあなたを助け出したし、気にも入ってるし、好意ももっています」(9510-9513)³³⁾ という好意あふれる言葉をかけたことを、聴衆は忘れていなかったであろうから。

ここにもゴットフリートの周到な筆運びを見る思いがする。

4

王妃の言葉で名誉を傷つけられたと主張して、内膳頭は一騎打ちの勝負を申出た。その一騎打ちは三日後に行われることに決まる。その間王妃と王女は楽人タントリスの看病にはげんだ。

「今や王女イゾルデはしばしば彼をみつめ、普通許される以上に (9993 uzer maze)³⁴⁾ 彼の身体や動作に注目した。……およそ乙女が男性の中に見つけ出す全ての点で、彼女は彼が気に入る、心のうちに称賛していた」(9992…10003)³⁵⁾。

この描写について、ニッケルは「夢中になって憧れている、半ば意識的な恋心をもちつつ、半ば恥しそうに隠れながら、半ば好気心から無遠慮な興味をいなく、見事にぎりぎりの乙女の雰囲気」³⁶⁾ が出ていると指摘した。

このニッケルの解釈に対して、フェルストナーは「王女は楽人とも騎士ともみえる不釣り合いな姿を発見しているのであって、ここでの純粋に女らしい乙女らしい興味が働いていることは否定されるべきではないとしても、〈半ば意識的な恋心〉は実際何の役目も果たす必要はない」³⁷⁾ と反論している。

しかし、タントリスに対する王女イゾルデの「半ば意識的な恋心」は王女の次の言葉にも読み取れるのではなからうか。

「奇蹟を行われる神さま、今までに行われたことで、また私たちになされたことで不足な点があるとすれば、確かに不足な点ですが、こんな立派な人が、こんな立派な体躯に恵まれた方が、さまよいながら国から国へ生活の糧を求めねばならない点です。

この人には当然のこととして、一つの国がふさわしいし、或は一つの領地がふさわしいことでしょうに。多くの国がつまらぬやり方で支配されているのに、この人には一つの国も与えられないとは世の中は不思議なものです。こんなにも能力もある立派な人こそ、財産と名誉をもつべきです。あの人は大変不運です。神さま、あなたはあの人を体躯にふさ

わしくない生活をお与えになりました」(10009-10032)。³⁸⁾

この王女の嘆きは、「騎士の行為にふさわしい地位をタントリスが得ていないということであって、その場合彼女は彼と結ばれてよいか、いや、結ばれねばならないのではないかということを明らかに意識している」³⁹⁾とカムブリッジは解釈している。

ところが逆にフルストナーは、「トリスタンの姿をじろじろ眺めた後につづく(10009-10032)イゾルデの言葉ではっきりと述べられているのは、彼女の興味をかき立てたものはこの不釣り合いさであるということだ」⁴⁰⁾という解釈を行った場面でもあった。

しかしながら、ゴットフリートが、王女イゾルデの中にタントリスとの最初の出会い以来、彼に対する愛が芽生えていたことを描写しつつけているからこそ、この王女の嘆きにつづいて語られる次の場面の悲劇性が、一層高められるのではなかろうか。

即ち、タントリスの入浴中にみがき上げられた彼の持ち物の中から、王女は彼の剣に刃こぼれのあることを発見する。その刃こぼれによって、彼こそ伯父モーロルトを倒した騎士トリスタンに他ならないという事実を知らざるを得なくなった悲劇を、ゴットフリートは次のように語っている。

「運命の望んだごとく(10058 also der billich wolde)、イゾルデは彼女の心の苦しみとなることを、またしても他の人よりも先に見つけてしまうことになった」(10057-10061)。⁴¹⁾

9370行で既に述べたように、息も絶えだえのトリスタンを王女イゾルデが誰よりも先に見つけた時、「神のごとき立法者自身の摂理」の働きとして、*also der billich wolte* という表現をゴットフリートは用いていた。今再び浴室の中の人物がタントリスではなくてトリスタンであったという確認の場で、同じ表現を詩人が用いている理由は、神の摂理のごとき運命的な力が二人の間に作用していることを表現するためであったろう。二人の間に働いているこのような運命的な力こそ、トリスタンと王女イゾルデの愛の力ではなかったろうか。

「ゴットフリートの物語における愛は、その成立と本質からみて非合理的、ないしは半合理的現象であるということがわかる」⁴²⁾と主張するシュネル(Rüdiger Schnell)も、9370行と10058行において、「ゴットフリートはイゾルデとトリスタンの二つの重要な遭遇をより高い摂理に帰因させている」⁴³⁾ことは認めている。

タントリスとはトリスタンの読み換えであるということに気付いた時、王女は次のように語る。「私があの人に注目するようになり、あの人姿や態度を、あの人すべてのことを、とても心に留めるようになって以来、あの人が高貴な生れたということを十分承知するようになっていたのだわ」(10127-10132)。⁴⁴⁾と。

この告白をニッケルは「彼女の心の恋の予感」⁴⁵⁾と解釈したが、フルストナーは、「王女は心の中でトリスタンの騎士出身と欺瞞とを予感していたのであって、〈彼女の心の恋の予感〉を確認しているとはどこからも読み取れない」⁴⁶⁾と反論した。

しかしこの告白は二人の最初の出合い以来、王女は彼の全てに強い関心を抱いていたという愛の告白とみるべきであろう。だからこそこの愛の告白に続いている、「さあ、いそげ、イゾルデ、お前の苦しみを晴らすのだ。お前の伯父を打ち倒したこの剣で彼が殺されるのなら、十分復讐を遂げたことになるのだ」(10139-10142)⁴⁷⁾ という王女の言葉に、アンビヴァレントな悲劇性を聴衆はきき取ることができたのではなかろうか。

王女イゾルデは剣を振り上げてトリスタンに迫っていったが、結局殺すことはできなかった。その理由をゴットフリートは次のように説明してみせる。

「彼女は仇敵の声を聞き姿を見ながら、やはり彼を殺すことができなかった。彼女のやさしい女心 (10255 wipheit) がすすんで、彼女にそうすることを引き止めた。彼女の中で激しく相争っていたのは、二つの対立物、相反する対立物、怒りと女心 (10260 zorn unde wipheit) であった。この二つは、出会えば互に具合の悪いもの同士である。イゾルデの中の怒りが仇敵を殺そうとすると、優しい女心 (10265 wipheit) が割って入ってきた。『だめよ、およしなさい』とそれはやさしく囁いた。こうして彼女の心は二つに割れ、一方は善、一方は悪となった。美しい人は剣を投げ捨てたかと思うと、すぐにまた拾い上げた。……こういう風に迷いがくり返されたが、到頭やさしい女心 (10277 wipheit) が怒りに対して打ち勝って、不倶戴天の敵は助かり、モーロルトの仇は討たれなかった」(10253…10280)。⁴⁸⁾

伯父モーロルトの仇敵トリスタンへの復讐から王女を押し止めたものは、「女心」(wipheit) であったと、4回も wipheit を詩人はくり返す。

この「トリスタン物語」の中で、ゴットフリートがここで初めて、⁴⁹⁾ しかも4回もくり返して wipheit を用いていることは注目に値しよう。ゴットフリートは4回もくり返すことによって、王女イゾルデの悲劇的なアンビヴァレンス、即ち怒り (zorn) と女心 (wipheit) の抗争が、結局女心の勝利に終わったことを告げている。この wipheitこそ、まさにトリスタンに対する王女イゾルデの愛そのものを象徴しているといえるのではなかろうか。

5

ブランゲーネの助言も加わって、命を救われたトリスタンはアイルランドを再訪した使命を、王妃や王女の前で語った。

グルムーン王はマルケ王の求婚の話をきかされ、コーンウォールとの和解を受け入れた。こうしてトリスタンは王の前で内膳頭との一騎打ちに臨むことになる。

一騎打ちの日、王宮へ登場してくる王女イゾルデについて、ゴットフリートは次のように語る。

「こうして喜ばしい曙の王妃イゾルデは彼女の太陽、アイルランドの奇蹟である光り輝

く乙女イゾルデの手をとってやってきた。王女は彼女の曙につき従って静々と変らぬ同じ足どりで歩を進めた。どこからみても可愛らしい姿で、すらりと伸びて、ほっそりと、まるで愛の女神ミンネが自分の愛玩物としてこれ以上はありえない究極の完成品として、造り上げたかようであった。……その内側には、愛の女神が身体と心をこんなにも美しく造り上げた人の姿が隠されていた。造り上げられたものと、縫い上げられたもの、この二つが生きた人間の姿をこれ以上立派には仕上げたことは未だかつてなかった」(10885…⁵⁰⁾10956)。

一方、誰が内膳頭の相手をするのだろうかと思われる中を登場してくるトリスタンについては、ゴットフリートは次のように語る。

「そこへまた美しい満月の、堂々としたブランゲーネが静々と彼女の同伴者トリスタンの手を取ってやってきた。この堂々とした礼儀正しい女性は、しとやかに歩を進めてきたが、その姿も態度も並はずれて魅力的で、その心も誇りにみち伸びやかであった。彼女の同伴者も彼女と並んで堂々とやってきた。彼には全てのものがものの見事に、驚くばかりに身に備わっており、騎士たるべきあらゆる美点を備えていた。騎士を贅える全てのものが彼には備わっていた。……彼の態度は立派で非の打ちどころがなかった。彼の全ての振る舞いは華麗であった。彼自身全ての点で素晴らしい衣装に包まれていた。彼が王宮へ入ってきた時、人々は彼のために道をあけた」(11080…11147。⁵¹⁾)。

ゴットフリートが二人の主人公の登場の様子を描く筆致には、シュネルの指摘するように、「(>Tristram-Saga< に比べて) 語り手によるこの構成が二人の内面の一体感を示している」⁵²⁾ のは明らかである。

ゴットフリートはかつて少年トリスタンがマルケ王の前に初めて姿を現わした時、「彼の身体は愛の女神ミンネが望んだ通りに造り上げられていた」(3332-3333)⁵³⁾ という書き出しでその美しい態度振る舞いの立派なことを語っていた。

今再び、王女イゾルデが愛の女神ミンネの愛玩物として造り上げられていることを聴衆に物語っている。愛の女神ミンネの「究極の完成品」ともいうべき二人の主人公について、ゴットフリートが長々と(王女については100行、トリスタンについては67行) 語ってきかせた理由は、二人の間の愛の成立が誰の耳にも当然のこととして感受されうるためであつたろう。

「騎士たるべきあらゆる美点を備えた」トリスタンから、竜の舌を突きつけられた内膳頭は一騎打ちを諦めざるをえなかった。「こうして、この詐欺は明らかな恥辱をうけて終りになった」(11365-11366)⁵⁴⁾ と語って、ゴットフリートはこの内膳頭エピソードを締めくくっている。

カムブリッジは「内膳頭の恥辱で終るこの章は、トリスタンとイゾルデが同じ美しさと同じ輝きをもつことを、われわれにはっきりとわからせた。その上、トリスタンとイゾルデの、その状況から考えて全く自然なかかわり合いを非常に心理的な微妙な筆致で描いて

みせた」⁵⁵⁾と評している。

ゴットフリートの「非常に心理的な微妙な筆致」の中に、王女イゾルデとトリスタンの愛の軌跡が、消し難いほどはっきりと浮び出ていると筆者には思われる。

注

- 1) 『相愛大学研究論集』第9号(通巻第40号)拙稿参照。
- 2) 上記第10号(通巻第41号)拙稿参照。
- 3) Bodo Mergell: Tristan und Isolde. Ursprung und Entwicklung der Tristansage des Mittelalters. 1949. S.21.
- 4) Lambertus Okken: Kommentar zum Tristan-Roman Gottfrieds von Strassburg. 1, Band. 1984. S.388f. 伊東泰治: 愛の殉教者 トリスタンとイゾルトーⅢー, 中部大学国際関係学部紀要 No. 13 (1994), 32頁以下にも詳しい。
- 5) 引用は Gottfried Weber: Gottfried von Strassburg Tristan. Text, Nacherzählung, Wort- und Begriffserklärungen. 1967. による。
8897…8924

Nu Tristan derst ze vride komen.
ie noch hat nieman vernomen,
waz er welle an gan.

8900 nu sol manz iuch wizzen lan,
son belanget iuch des mæres niht:
daz mære saget unde giht
von einem serpande;
der was do da ze lande.

8905 der selbe leide valant
der hæte liute unde lant
mit also schedelichem schaden
so schedelichen überladen,
daz der künec swuor einen eit

8910 bi küniclicher warheit:
swer ime benæme daz leben,
er woltim sine tochter geben,
der edel und ritter wære.

.....

8920 diz mære erkande ouch Tristan wol:
diz eine sterket in dar an,
daz er der reise ie began,

diz was sin meistiu zuoversiht,
anders trostes hæte er niht.

6) Gisela Hollandt: Die Hauptgestalten in Gottfrieds Tristan. 1966. S.96.

7) 8948-8962

der einer von den vieren
truhsæze was der künigin;
8950 der was ouch unde wolte sin
der jungen küniginne amis,
wider ir willen alle wis;
und alse ie man ze velde reit
durch gelücke und durch manheit,

8955 so was ouch der truhsæze da
eteswenne und eteswa
durch niht, wan daz man jæhe,
daz man ouch in da sæhe,
da man nach aventiure rite,
8960 und anders was ouch niht dermite,
wan ern gesach den trachen nie,
ern kerte belderichen ie.

8) G. Hollandt: ibid. S.97.

9) 9060-9064

9060 uz dem rachen er im sneit
der zungen mit dem swerte
der maze, als er ir gerte;
in sinen buosem er si stiez;
den giel er wider ze samene liez.

10) 9221-9246

'ja herre, al diu werlt' sprach er
'diu enbiete niuwan ore her,
betrachte und sehe daz wunder an,
waz der geherzete man

9225 und der gestandene muot
durch liebes wibes willen tuot!
daz ich der not, in der ich was,
ie dannen kam und ie genas,
des wundert unde wundert mich

9230 und weiz ouch wol binamen, wær ich
senftē alse ein ander man gewesen,
ine wære niemer genesen.
ine weiz niht, wer er wære:
ein aventiurære,

- 9235 der ouch nach aventiure reit,
der was ze siner veicheit,
e danne ich kæme, zuo zim komen,
der hat sin ende da genomen.
got hæte sin vergezzen:
- 9240 si sint beidiu vrezzen,
ros unde man ist allez mort.
daz ros daz lit noch halbez dort
zekuwen unde besenget.
waz töhtez iu gelenget?
- 9245 ich han me nœte erliten hie mite,
dan kein man ie durch wip erlite.'
- 11) Emil Nickel: Studien zum Liebesproblem bei Gottfried von Straßburg. 1927. S.31.
- 12) 9269-9271
diu süeze maget, diu schoene Isot,
9270 diu was reht in ir herzen tot:
so leiden tac si nie gesach.
- 13) 9286-9292
e ichs gevolge, so stich ich
reht in min herze ein mezzet e;
e sin wille an mir erge,
ich nim mir selber e den lip.
9290 ern gewinnet niemer wip
noch vrouwen an Isote,
ern habe mich danne tote.'
- 14) Gottfried Weber: Gottfrieds von Strassburg Tristan und die Krise des hochmittelalterlichen Weltbildes um 1200. Band I. 1953. S.51f.
- 15) Hans Furstner: Der Beginn der Liebe bei Tristan und Isolde in Gottfrieds Epos. In: Neophilologus 41 (1957). S.31.
- 16) 9369-9376
nu ergiengez, alse ez solte
9370 und alse der billich wolte,
diu junge künigin Isot
daz si ir leben unde ir tot,
ir wunne unde ir ungemach
zallererste gesach.
9375 von sinem helme gienc ein glast,
der vermeldet ir den gast.
- 17) Rosemary Norah Combridge: Das Recht im, Tristan' Gottfrieds von Strassburg. 1964. S.145.
- 18) 9450-9460
9450 'a herre got der guote,

- du hast min unvergezzen:
mich hant driu licht besezen,
diu besten, diu diu werlt hat,
manges herzen vröude unde rat
9455 und maneges ougen wunne:
Isot diu liehte sunne
und ouch ir muoter Isot
daz vroliche morgenrot,
diu stolze Brangæne
9460 daz schoene volmæne!’
- 19) 前号拙稿注 3) 参照。
20) Franziska Wessel: Probleme der Metaphorik und die Minnemetaphorik in Gottfrieds von Strassburg, *Tristan und Isolde*. 1984. S.581.
21) 9472-9473
‘diz ist Tantris der spilman’
sprach si‘ob ich in ie gesach.’
22) Friedrich Ranke: *Tristan und Isolde*. 1925. S.202.
23) H. Furstner: *ibid.* S.34.
24) 訳語については、Gottfried von Straßburg, *Tristan*. Nach dem Text von F. Ranke neu hrsg., ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von RÜDIGER KROHN. Band 3. 1981. S.107.
25) 9847-9852
‘so hastu braht ein houbet dan:
daz bræhte ouch lihte ein ander man,
ich meine, ob er Isolde
9850 da mite verdienen solde.
sin wirt aber gewonnen niht
mit also cleiner geschiht.’
26) 9864-9865
‘ine wart iu nie getriu noch holt
9865 noch zware niemer werden sol.’
27) 9866-9892
‘Ja’ sprach der ander ‘ich weiz wol,
ir tuot vil rehte als elliū wip;
ir sit alle also gelip,
also gartet unde gemuot:
9870 iuch dunket ie daz arge guot,
daz guote dunket iuch ie arc;
diu art ist an iu allen starc.
ir sit verkeret alle wis:
iu sint die tumben alle wis,

- 9875 iu sint die wisen alle tump;
 ir machet uz dem slehten crump
 und uz dem crumben wider sleht;
 ir habet allen ungereht
 an iuwer seil gevazzet:
 9880 ir minnet, daz iuch hazzet;
 ir hazzet, daz iuch minnet.
 wie sit ir sus gesinnet,
 wie minnet ir so harte
 der dinge widerwarte,
 9885 daz man der so vil an iu siht!
 der iuch da wil, desn welt ir niht
 und welt den, der iuch niene wil.
 ir sit daz irresameste spil,
 daz ieman uf dem brete kan.
 9890 er ist ein sinneloser man,
 der ane bürgen durch daz wip
 iemer geveilet den lip.
- 28) 9898-9954
- ‘truhsæze, dine sinne
 die sint starc unde spæhe,
 9900 der spæhe an sinnen sæhe;
 si habent dem gelichen schin,
 als si ze kemenaten sin
 in der vrouwen tougenheit bedaht.
 dar zuo hastu si vür braht
 9905 reht alse ein vrouwen ritter sol.
 du weist der vrouwen art ze wol;
 du bist dar in ze verre komen:
 ez hat dir der manne art benomen.
 du minnest ouch ze harte
 9910 der dinge widerwarte.
 mich dunket, dirst ouch wol dar mite.
 du hast die selben vrouwen site
 sere an din seil gevazzet:
 du minnest, daz dich hazzet;
 9915 du wilt, daz dich niht enwil:
 diz ist doch unser vrouwen spil;
 waz nimest du dich hie mit an?
 so dir got, du bist ein man,
 laz uns unser vrouwen art.

- 9920 dun bist niht wol dar mite bewart.
 habe dine mannes sinne
 und minne, daz dich minne;
 welle, daz dich welle:
 daz spil hat guot gevelle.
- 9925 du seist uns ie genote,
 du wellest Isote
 und si enwelle din niht.
 daz ist ir art: wer mac des iht?
 si lat der dinge vil hin gan,
- 9930 die si doch vil wol möhte han.
 ir ist der vil unmære,
 dem si doch vil liep wære,
 der du ze hant der erste bist.
 daz selbe ir von mir gartet ist:
- 9935 ich selbe enwart dir ouch nie holt.
 ich weiz wol, alse entuot Isolt:
 ez ist ir gartet von mir.
 du verliusest michel minne an ir.
 diu schœne, diu reine
- 9940 si wære ze gemeine,
 obs iegelichen solte
 wellen, der si wolte.
 Truhsæze, als du hast geseit,
 min herre der sol sinen eit
- 9945 vil gerne an dir bewæren.
 sich, daz du dinen mæren
 und diner rede so mite gast,
 daz dus iht under wegen last:
 volge dinen sachen!
- 9950 ich hœre sagen, den trachen
 den habe ein ander man erslagen:
 sich, waz du da zuo wellest sagen.'
 'wer wære der?' 'ich weiz in wol
 und wil in bringen, swenne ich sol.'
- 29) E. Nickel: *ibid.* S.30f.
- 30) Reiner Dietz: *Der 'Tristan' Gottfrieds von Straßburg. Probleme der Forschung* (1902–1970) 1974. S.66.
- 31) 9717–9723
 wan er hæet an ir einer do
 sunderlicher sælden zwo,

- der allerbesten, die der man
9720 an liebem wibe vinden kan:
schoene unde wisheit,
der was der maze an si geleit,
dazs ime wol mohte liep sin.
- 32) E. Nickel: ibid. S.30. 注 3)
- 33) 9510–9513
9510 bi den genaden, alse ich dir
nu unde e males han getan,
daz ich dich zwirnt erneret han
und bin dir willic unde holt,
- 34) 9993 訳語について E. Nickel: ibid. S.47. mehr als gewöhnlich, schicklich, mehr als sie eigentlich dürfte.
- 35) 9992…10003
nu nam Isot sin dicke war
und marctin uzer maze
an libe und an gelaze;

.....
swaz maget an manne spehen sol,
daz geviel ir allez an im wol
und lobetez in ir muote.
- 36) E. Nickel: ibid. S.48.
- 37) H. Furstner: ibid. S.31.
- 38) 10009–10032
‘got herre wunderære,
10010 ist iht des wandelbære,
dest ie begienge oder begast,
und des an uns geschaffen hast,
sost hie zeware wandel an,
daz dirre herliche man,
10015 an den du solhe sælekeit
libes halben hast geleit,
daz der als irrecliche
von riche ze riche
sine notdürfte suochen sol.
10020 im solte billich unde wol
ein riche dienen oder ein lant,
des dinc also wære gewant.
diu werlt stat wunderliche,
so vil manic künicriche

- 10025 besetzt ist mit swacher art,
daz ime der einez niht enwart.
ein lip also gebære,
der so getugendet wære,
der solte guot und ere han.
- 10030 an ime ist sere missetan.
got herre, du hast ime gegeben
dem libe ein ungelichez leben.'
- 39) R. N. Combridge: *ibid.* S.59.
- 40) H. Furstner: *ibid.* S.31.
- 41) 10057–10061
Nu ergiengez aber Isolde,
also der billich wolde:
dazs aber ir herzequale
- 10060 zem anderen male
vor den andern allen vant.
- 42) Rüdiger Schnell: *Suche nach Wahrheit. Gottfrieds »Tristan und Isold« als erkenntniskritischer Roman.* 1992. S.222.
- 43) *dito.* S.223.
- 44) 10127–10132
wie wol ich wiste al dise vart,
sit ich in merkende wart,
sit ich an ime lip unde gebar
- 10130 und sin dinc allez also gar
besunder in min herze las,
daz er gebürte ein herre was!
- 45) E. Nickel: *ibid.* S.49.
- 46) H. Furstner: *ibid.* S.32f.
- 47) 10139–10142
Nu ile, rich din leit, Isot!
- 10140 gelit er von dem swerte tot,
da mite er dinen øheim sluoc,
so ist der rache genuoc!'
- 48) 10253–10280
si horte ir vint unde sahen
und mohte sin doch niht geslahen:
- 10255 diu süeze wipheit lag ir an
unde zucte si da van.
an ir striten harte
die zwo widerwarte,
die widerwarten conterfeit

- 10260 zorn unde wipheit
 diu übele bi ein ander zement,
 swa si sich ze handen nement.
 so zorn an Isolde
 den vint slahen wolde,
- 10265 so gie diu süeze wipheit zuo:
 ‘nein’ sprach si suoze ‘niene tuo!’
 sus was ir herze in zwei gemuot,
 ein herze (was) übel unde guot.
 diu schœne warf daz swert dernider
- 10270 und nam ez aber iesa wider:

 sus lie der zwivel umbe gan,
 biz doch diu süeze wipheit
 an dem zorne sige gestreit,
 so daz der totvint genas
- 10280 und Morolt ungerochen was.
- 49) Word-Index to Gottfried's TRISTAN. 1958. 参照。
- 50) 10885...10956
- 10885 sus kam diu küniginne Isot,
 daz vroliche morgenrot,
 und vuorte ir sunnen an ir hant,
 daz wunder von Irlant,
 die liechten maget Isote;
- 10890 diu sleich ir morgenrote
 lise unde stæteliche mite
 in einem spor, in einem trite,
 suoze gebildet über al,
 lanc, uf gewollen unde smal,
- 10895 gestellet in der wæte,
 als si diu Minne dræte
 ir selber zeinem vederspil,
 dem wunsche zeinem endezil,
 da vür er niemer komen kan.

 10950 und innerthalben luzen
 daz bilde, daz diu Minne
 an libe und an dem sinne
 so schone hæte gedræt:

- diu zwei, gedræt unde genæt,
 10955 diun vollebrahten nie baz
 ein lebende bilde danne daz.
- 51) 11080...11147
- 11080 hie mite kam ouch geslichen sa
 diu stolze Brangæne,
 daz schoene volmæne,
 und vuorte ze handen
 ir geverten Tristanden.
- 11085 diu stolze und diu wol gesite
 si gieng im siteliche mite,
 an libe und an gelaze
 liutsælic uzer maze,
 ir muotes stolz unde vri.
- 11090 ouch gieng ir ir geverte bi
 in stolzlicher wise;
 des dinc was ouch ze prise
 und ze wunder uf geleit
 an iegelicher sælekeit,
- 11095 diu den ritter schepfen sol:
 ez stuont allez an im wol,
 daz ze ritters lobe stat.
-
- sin gebar was herlich unde guot.
 al sin geverte daz was rich:
 er was selbe rilich
- 11145 an allen sinen sachen.
 si begunden ime rum machen,
 da er zem palas in gie.
- 52) R. Schnell: *ibid.* S.223.
- 53) 3332-3333
- dar zuo was ime der lip getan,
 als ez diu Minne gebot:
- 54) 11365-11366
- 11365 sus nam der valsch ein ende
 mit offentlichen schende.
- 55) R. N. Combridge: *ibid.* S.67.

参考文献

- Gottfried von Straßburg: Tristan und Isolde. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen und erläutert von Günter Kramer. (Verlag der Nation 1970.)
- Gottfried von Strassburg: Tristan. Translated entire for the first time. (Penguin Books 1972.)
- Gottfried von Straßburg: Tristan. Hrsg. von Karl Marold. (Walter de Gruyter 1977.)
- Gottfried von Straßburg: Tristan. Deutsche Klassiker des Mittelalters. Neue Folge Band 4. 1978.
- Gottfried von Straßburg: Tristan. Übersetzt von Xenja von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel. (W. Fink Verlag 1979)
- Gottfried von Strassburg: Tristan und Isold. Nach der Übertragung von Hermann Kurtz bearbeitet von Wolfgang Mohr. (Kümmerle Verlag 1979.)
- 『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳 郁文堂 1987。